

# 三好市「旧東祖谷山村」の方言

方言班 (徳島県方言学会)

仙波 光明\*<sup>1</sup> 岸江 信介\*<sup>1</sup> 津田 智史\*<sup>2</sup>

**要旨：** 旧東祖谷山村の方言について、あいさつ表現に残る方言、語彙項目として「片づける、捨てる、地震、化粧する」などをどのように表現するか、また接続助詞「キニ、キン」、「コソー已然形」の係り結びなどの残存状況、否定表現の「ザツタ、ナンダ」、アスペクト形式の「ヨル、トル」の使用状況等について調査した。その結果、東祖谷山村に独特の形式がそれほどには多くないこと、またアスペクト形式については、ヨルとトルの使い分けが比較的良好に保たれているものの、語によってはヨル・トルともに進行相に使われる場合のあることが分かった。今回の調査で、旧東祖谷山村に特有の現象と考えても差し支えないかもしれないものとして、「シマツナ」を「けち(吝嗇)」の意味で使うこと、「化粧する」の意味で二段活用形の「ヤツスル」を使用する人がいたことがある。

**キーワード：** あいさつ、シマツナ、ケン/キン、ヨル/トル、祖谷弁辞典

## 1. はじめに

東祖谷(旧東祖谷山村)は三好市の南東部、高知県との県境に位置している。周囲を山で囲まれ、まさしく秘境の名のままの姿であるが、金沢(1956)によると、祖谷方言という特異なものはなく、言語や文化の影響としては祖谷川の上流と下流を境にして、上流は山分地域の影響を、下流は旧三好郡の影響を受けているという。

本稿では、東祖谷の方言調査結果のうち「あいさつ・語彙・文法・アスペクト」について報告する。

話者は東祖谷の生え抜きの方を対象とし、9地点(図1)で、老年層と呼ばれる方々17名(男7女10)にご協力いただいた(表4)。全て調査票を見てもらいながらの対面調査を行い、話者の声を録音しながら調査者がメモを取る形で進めていった。話者が少ないこともあり、結果に強い確証が得られない部

分もあるが、今回得られたデータのうち興味深い部分を中心に報告したい。

## 2. あいさつ

日常よく使うであろう言葉について調査した。どの項目についても、「コンニチワ」や「サヨナラ」など、一般的に広く使われるものが多く、特異なものはさほど見られなかった。ただ、少数ではあるが「オハヨーゴザンシタ」「アリガトゴザンシタ」といった丁寧表現も見られたが、これは脇町の方言として記録されている(国見 1999)。なお、阿波方言として海部地域では「ゴザリマス、ゴザンス、ゴワス、ガス」なども丁寧表現で使われており、「ゴザンス」は祖谷でも見られた。また、山間の限られた地域らしく、「ごめんください」の項目では、馴染みでない人が来るのが珍しいので、「オルカエー」など、丁寧な言い方よりも親しみのある呼びかけが見られる。

\*1 徳島大学総合科学部 \*2 徳島大学人間・自然環境研究科院生

また「おはよう」の項目では、「オヒナッテオィデルカエ」という表現が見られた。これは、「オヒナル」(お昼なる)＝お目醒めになるという意味で、16世紀以降に女房詞として用いられた古語であり、目上の人に対して使われていた阿波の俚言でもあったが、現在ではほとんど確認できない。今回の調査では一人の話者からかろうじて聞くことができた。現在の東祖谷でも、朝の挨拶言葉は「オハヨーゴザイマス」が主流となっているようだ。

「こんばんは」の項目では、前述したように「コンバンワ」の形にほぼ統一されている中で、「オシマイ」類の言葉(オシマイデ、シマワンカエ等)がいくつか見られた。「オシマイ」類については、古い表現であると言われる方と、仕事の帰りや作業の終わりにこの言葉をかけると言われた方がいた。「オシマイ」類の表現が「コンバンワ」と同義の夜のあいさつで使われるというのは、仕事の終わり＝夕暮れというイメージから生まれたのかもしれない。しかし、仕事の終わりにかける言葉というのが一般的なようだ。

### 3. 語彙

#### 1) 地区内共通の語彙

金沢(1956)、俵裕(1990)ほかに、祖谷川の上流域と下流域で方言の差が見られるという記述があるが、今回の調査の結果からは目立った差異は認められないと言えそうである。もっとも、調査語彙をしばらくこんだために微妙なところまでは分からないといったこともあろう。ここでは、5項目だけに絞って考察を述べる(表1)。

東祖谷地区内で、さほどの地域差が認められなかった語として、以下のような例を挙げることができる。「片付ける」を「ツマエル」,「捨てる」を「ホール」と言うのは県下全域で認められることである。なお、これに対して「ヨチメル」は祖谷地方独特の語(金沢治 1961・森本 1979など)であり、徳島県内の他地域では確認が困難である。『三名村史』は、高知系かとする。

「邪魔になる」の項目では、阿波言葉の「マガル」と高知の俚言「マギル」が混ざってはいるものの、この2つ以外の表現は出てこなかった。『徳島県言

語地図』(2002)を見ると、徳島県南部・高知県との県境付近にまばらではあるが「マギル」が広範囲に見られる。これらの語のうちには、高知県と共通のものが見られるのである。

また、標準語に近い形に統一されているものとして、「地震」や「化粧をする」を挙げるができる。明治期にはまだ地震を「ナイ」と呼ぶことがあったようだが、昭和期にはもはや稀な古語となっていた(金沢 1961)。「化粧すること」を「ヤツス」と表現するのは、江戸時代上方を中心におもに西日本に広がっていた言い方であるが、現在ではもう消え去ろうとしているようだ。「ヤツスル」は、「死ぬる・去ぬる」への類推で生まれたと思われる形であり、その意味で興味深いのだが、知らない、聞いた事もないという方も多くいた。

#### 2) 地区により違いの見られる語彙

東祖谷地区内で差異が見られた項目もいくつかあった。まず、「けちな」の項目を見てみよう(図2)。「コスイ」が東祖谷全域に広く分布しており、その他に「ヘラコイ」や「ヨクナ」,「シマツナ」などが見られる。「ヘラコイ」は徳島県の代表的な俚言だが、多くは「ずるい」の意味で、また場合によっては「賢い」の意味で使われる。東祖谷でもこれが普通らしく(俵 1990ほか)、これが「けち」の意味で使われるのは珍しく、さらに検討を要する。

「けちな」の意の「ヨクナ」は、富山県や島根県の方言集には記録されているが、徳島県の方言資料には見られないようだ。

さて、東祖谷では「シマツナ」が「けち(吝嗇)」の意味で使われている。今回の調査では久保地区の2人から回答を得ているだけだが、別の機会に菅生<sup>すがい</sup>の人からも同様の情報を得ている。これは東祖谷に特徴的なことかもしれない。いずれにしても、周辺地域での調査が必要であろう。なお、一般の国語辞典には「しまつ(始末)」に「けち(吝嗇)」の意味を記載するものはない。また、小型国語辞典の中では、わずかに『岩波国語辞典』が「浪費をせず、儉約する」の意味を、古風な使い方という限定付きで説明しているだけである。

表1 語彙調査結果

ID	片付ける	捨てる	邪魔になる	地震	化粧する
No.1	ツマエル	ホール	マガル, マギル	ジシン	ケショースル
No.2	ツマエル	ホール	マギル	ジシン	ダテスル, ケショースル
No.3	ツマエル, ヨチメル (古)	ホール	マガル	ジシン	—
No.4	ツマエル	ホール	マギル, ドマゲル	ジシン	ケショースル
No.5	ツマエル	ホール	マギル	ジシン	ケショースル
No.6	ツマエル	シテル	マガル	ジシン	ケショースル
No.7	ツマエル, シマウ	ホール	マガル, ドジャマコク	ジシン	ケショースル
No.8	ツマエル	ホカス	マギル	ジシン	ヤツスル
No.9	ツマエル, ナオシテ	ホール	マガル	ジシン	ケショースル
No.10	ツマエル, シマウ	ホール	マガル, マギル	ジシン	オシロイヌル
No.11	ツマエル	ホール	マガル	ジシン	ケショースル
No.12	ツマエル	ホール	マガル	ジシン	ケショースル
No.13	ツマエル	ホール	マギル	ジシン	ヤツス
No.14	ヨチメル	ステル, ホル, ホカス	マガル, マギル	ジシン	—
No.15	ツマエル	ホール	ジャマニナル	ジシン	—
No.16	ツマエル	ホール	マガル	ジシン	ケショースル
No.17	ツマエル	ホール	マギル	ジシン	ケショースル

#### 4. 文法

##### 1) 接続助詞 ケン・ケニ・キン・キニ

原因・理由を表す助詞については、東祖谷の全域で「キン・キニ」「ケン・ケニ」の両方が見られる(表2)。多くの人はこちらも使うようだが、今回教えていただいた方々の約3分の1にあたる6人は、どちらか一方のみを使っている、という結果となった。森(1962・1982)によると昭和30年代には、「ケン・ケニ」が下郡(麻植郡以東の吉野川下流域)、うわて(小松島～阿南)、灘(海部郡一帯)、南方山分(那賀川中上流域)で使われるのに対して、「キン・キニ」は県西部すなわち上郡(旧美馬・三好両郡)、北方山分(旧山城・東西祖谷・一字の各町村)で使われていた。現在では、「ケン・ケニ」の方だけを使用する地域が上郡・北方山分でも広がりつつあるようだ。

なお、徳島県下の「ケン・ケニ」「キン・キニ」の分布状況は、近県での分布状況と照らし合わせると、大変興味深い。「キン・キニ」は、香川県西部一帯、愛媛県伊予三島以東、高知県では東部の安芸郡・香美郡一帯で見られるという(加藤 1982)。したがって、「キン・キニ」は四国の内陸中心地域に分布するのである。ただし、言葉の歴史という観点からは、

この分布が何を意味するのか、よく分からない。また、「ケン・キン」より古い形と思われる「ケニ・キニ」は老人層で用いられている。今回、協力していただいたほとんどの方が「キニ」であった。

##### 2) 副助詞 ビャー・バー・シカ

副助詞項目「百円くらい使った」の「くらい」にあたる言い方については、5人から「百円ビャー、バー」を使うとの回答があったものの、他は「百円グライ」という形に統一されている。全体的に見て「ビャー、バー」はその存在を失いつつあると言えよう。5人の回答から断定的なことは言えないが、『徳島県方言地図』をも参照したところ、「ビャー」は祖谷川上流地域に、「バー」は同下流地域に分布するという傾向が見られる。森(1982)は、「ビャー」を里分に多い語、「バー」を山分・中分の用語としており、池田を中心に見ると、より交通不便であったと思われる祖谷川上流地域に里分型の語が使われている点が興味深い。とはいえ、かつては「ビャー、バー」双方が使われていた(金沢 1961ほか)とも見られ、西側の地域に、高知でまだよく使われている「バー」が残っているということかもしれない。

「百円シカ使っていない」の「シカ」に相当する部分には、共通語形の「シカ」と言う人も数人いるが、分量や程度の僅少なことを表す「コソ」という

言い方が広く残っている。これは山分の特徴である(金沢治 1961)。

### 3) コソと係り結び

「口デコソ言ワネ」のように、係助詞「コソ」のあとを已然形で結ぶ、いわゆる係り結びは、祖谷地方において明治期にはきちんと行われ(喜田貞吉, 俵1990の引用による), また〔昭和20年代までの?〕徳島県下全域においても普通に行われていたとされる(金沢 1976)。徳島県下でも古風な言い方を残す祖谷地方ではあるが、『徳島県言語地図』で見ると、この形式はもう残っていないようだ。

### 4) 否定表現

否定表現について「見なかった」「書かなかった」「行かなかった」「行きはしなかった」「しなかった」等をどのように言うか、調査した。図3を見てわかるように、「イカナンダ」「イカザッタ」ともによく使われている。その中で、この5項目すべてに「ナンダ」で答えた方が2名、「ザッタ」で答えた方が2名、そのほかの方は、項目によりどちらを使うという回答や、両方が交互に出てくる場合もあった。分布を見ると「ザッタ」のほうが東西に広がっており、「ナンダ」はそれには含まれる形のように見える。「ザッタ」は、高知県下で広く使われており、香川県下においてもよく聞かれるが、徳島県では高知

との県境、剣山周辺の山村、山分地域にのみ見られる。一方「ナンダ」は近畿方言で広く使われる表現であり、古くから県内全域でも使われてきた言い方である。この「ナンダ」の存在は、徳島の方言が他の四国の方言よりも近畿方言に距離が近いと言う事実を明確に表している代表例と言えよう。

### 5) 形容動詞活用語尾

形容動詞終止形は、古くから「ジャ」という語形が、阿波を含め西日本に広く行われてきた。そして、連体形は「ジャ／ナ」であり、仮定形は「ジャッたら」になるはずである。ところが、徳島方言の場合には、仮定形に「ダッたら」という共通語形が現れる。さらに、上郡では仮定形に「ナカッたら」が使われる点の特徴になっている。形容動詞でありながら、意思・未来を表す「う」や完了の「た」や仮定の「たら」に続くときには形容詞のような形が現れるのである。具体的には、次に示すようになる。

静かだろう → 静かならろう  
 静かだった → 静かなかった  
 静かだったら → 静かなかったら

このように「静かな」を語幹とする形容詞のような活用が一部に現れる。

なお終止形には稀に「静かジャ」が見られる(70代に2名)ものの大多数が「静かな」である(11名)。

表2 文法項目調査結果

ID	降るから	(結果を受けて)だから～	あったからだ(理由)	だけど
No.1	降るキニ	ホンナキニ	アッタキン	ケンド
No.2	降るキニ	ホンナキニ	アッタキン	ホナケンド
No.3	降るキニ	ホンジャキン	アッタキニ	ホンジャケンド
No.4	降るキニ	ホンナキニ	アッタキン	ホンナケンド
No.5	降るキニ, 降りソナキニ	ホンダケン	アッタキン	ホナケンド, ホナケド
No.6	降るキニ	ホナキニ	アッタケン	ホナケンド
No.7	降るキニ	ホンナキニ	アッタキニ	ホナケンド
No.8	降るキニ	ホンダキニ	アッタキニ	ダケド
No.9	降るキニ	ホンナキニ	アッタキニ	ダケド
No.10	降るケン, 降るケニ, 降るキニ	ホンナケン	アッタキン	—
No.11	降るキニ	ホナケン	アッタキン	ホナケド
No.12	降るケン	ホンジャケン	アッタケンノ	ホナケンド
No.13	降るキニ	ホンナキン	アッタキン	ホンナケンド
No.14	降るキニ	—	アッタキニ	ホアッタケンド
No.15	降るカラ	ダカラ	アッタカラ	ホンナケンド
No.16	降るカラ	ダカラ	アッタカラ	ホンナケンド
No.17	降るキニ	ホンナキニ	アッタキニ	ホンナケド

また「静かヤ」が昭和20年生まれ的女性1名に見られた。下郡地域のように「ヤ」の出現が多くなっている(仙波 2006)現象は、老年者層においては認められなかった。

6) アスペクト

「アスペクト(相)」とは、動詞の表す動作が、ある時点においてその動作のどのような過程にあるかを問題とする形態論(語形についての論)的カテゴリーを言う。したがって、「(雨が)降り始める」や「降り終わった」などもアスペクト論の対象であるが、多くの場合、「～ている・～である」(またはその類似補助動詞)を伴う形式について検討が加えられる。ここでは、ヨル・トルが続く形式について述べる(表3)。

(1) 西日本諸方言の進行/完了に関わるアスペクト形式

現代の西日本諸方言では、アスペクトについてヨル系とトル系の形が見られる。基本的にはヨル系が進行状態を、トル系が完了状態を表すが、地域によってはトル系が進行の意まで表すことがある。それぞれの形などについて簡単に説明すると、進行相形式のヨル系には「ヨル、ヨー、ヨン、ヨッ」などがあり、徳島で聞かれる「降ッリヨル」などもこの形式である。完了の結果相形式のトル系には「トル、トー、チョル、チョッ」などがある(ここに挙げた形は徳島以外の例も含む)。

(2) アスペクトに関連した動詞の分類

今回の調査では動詞を、次のような3種に分類して考察する。

- ① 主体動作動詞=主体の動作をとらえて表現する動詞:行く, 降る, 遊ぶ, 等
- ② 主体動作客体変化動詞=動作主体の動作によって客体に何かの変化を生じることを表す動詞:開ける, (灯りを)つける, 等
- ③ 主体変化動詞=動作主体に変化が生じることを表す動詞:死ぬ, 消える, 等

(3) 対立と競合

ヨルとトルの役割がきれいにわかれているものを「対立」していると言い、トルが進行相までも表してしまう状況にあるものを「競合」していると言う。一般的にアスペクトは、上の①→②→③の順に競合を起こすことが確認されている。

以下では、ヨル系とトル形の競合状況を見るために、進行相の項目に焦点を当てて考察する。競合について論じるときに将然相(動作を今まさに始めようとする状態)にも着目する必要があるが、今回は明確なデータが現れなかった。この点については、さらに調査を重ね別の機会に報告したい。

アスペクトに関する調査の話者は9名のみの回答となっている。

主体動作動詞について「降っている」と「行っている」の結果を見ると、「(いま)降っている(進行相)」は、すべての回答者から「フリヨル・フリ

表3 アスペクト調査結果(進行相)

ID	主体動作動詞		主体動作客体変化動詞		主体変化動詞	
	降っている	行っている	開けている	飲んでいる	死につつある	消えつつある
No.1	フリヨル	イキヨル	アケヨル	ノミヨル	シニヨル	キエル
No.2	フリヨル	イッキヨル	アケヨル	ノンミヨル	回答なし	キエソーナ
No.3	フリヨル	イッキヨル	アケヨル アケヨー	ノンミヨル ノンミヨー	シンニヨル	キエヨル
No.6	フリヨル	イッキヨル	アケヨル	ノンミヨル	シニソー	キエソーナ
No.7	フリヨル フットル	イキヨル イッキヨル	アケヨル	ノミヨル ノンミヨル	イカン シヌ	キエルカモワカラン
No.8	フリヨル	イッキヨル	アケヨル	ノンドル	シンニヨル	ケール
No.9	フリヨル フットル	イットル	アケヨル	回答なし	回答なし	回答なし
No.11	フリヨル	イキヨル	アイタ	ノミヨル ノンミヨル	シニソーナ	キエソーナ
No.16	フリヨル	イキヨル	アケヨル	ノンミヨル	シニソーナ シンニヨル	キエソーナ

ヨル」のヨル系の言い方を聞くことができた。それに加えて、ヨル系と共に「フットル」も東祖谷各地域の6名から得ることができた。これを見る限りでは、「競合」がおこっているようでもある。

一方、「(いま) 行っている (進行相)」については、全員からヨル系が聞いたものの、トル系は2名からのみという結果となり、動詞「行く」については「競合」が進んでいるとは言えない。

主体動作客体変化動詞については、「開ける」と「飲む」について調査を行った。

「(いま) 開けている (進行相)」, すなわち、開けつつあるという状況については、ほぼ全員からヨル系を使うという回答が得られ、また5名からはトル系も使うという答えを得た。これはわずかではあるが回答者の半数を超えており、しかも京上から東側の地域にある程度固まって見られることから、この辺りでは「競合」しているのかもしれない。

「(いま) 飲んでる (進行相)」についても、「ノンミヨル・ノンミヨー・ノミヨル」などヨル系が占めていて、トル系も使うと答えた方は1名のみであった。したがって、「飲む」に関しては、「競合」は進んでいない。

主体変化動詞については「消える」「死ぬ」を調査した。

「(いま) 消えている (進行相)」, すなわち、いま消えつつあるという状況に対する表現について聞いた結果は、もっとも多い回答が「キエソーナ」というものだった。「キエヨル」というのは、1名のみの回答となっている。ヨル系の答えを得られなかったが、同時にトル系もまったく現れていない。しかし、「(もう) 消えている (結果相)」では、全ての回答者からトル系を得た。つまり、進行相については「消えヨル」を使うのか、「消えトル」を使うのか、明確な回答を得られなかったものの、結果相については「消えトル」を使うことが明らかであり、「消える」については、ヨルとトルが「対立」していると判断できよう。

「(いま) 死んでいる (進行相)」, 死につつつあるということに関しては、ヨル系が4名、「シニソーナ」が3名から出ており、トル系の「シンドル」も使うといった方が2名いた。標準語の場合には、「死ぬ」

は進行相を持たない、つまり「死ンニヨル」のような表現ができないとされているのだが、東祖谷では、徳島県の他の地域と同様に「死ぬ」に進行相があることが明らかである。なお、この結果については、ヨルとトルが「対立」しているのか、「競合」しているのかについての判断は避けておきたい。

以上、アスペクト項目での調査目的(ヨルとトルの使い分け)については、おおまかには「対立」の状況にあると言えそうだが、語によっては「競合」の段階に進みつつあるようでもあると言えよう。

## 5. 祖谷弁辞典

この項では、我々の調査ではなく、1999年に東祖谷山中学の生徒たちによって作られた『祖谷弁辞典』からの抜粋を紹介する。

この辞典は、1998年度の地域学習の一環として、国語科の江口文先生ほかの方々の指導のもとで、祖谷弁を考える会の5名の生徒たち(井元麻二子、采本麻美、谷直美、中岡香織、月岡真理)によってまとめられたものである。

この辞典は、次のような形式のカードを埋める作業に基づいて作られた。もとのカードは縦書きである。

私がキャッチした祖谷弁は <div style="border: 1px solid black; width: 150px; height: 15px; margin: 5px auto;"></div> です。 これは 「 <span style="border: 1px solid black; display: inline-block; width: 150px; height: 15px; vertical-align: middle;"></span> 」という意味です。 ( ) さんが「 <span style="border: 1px solid black; display: inline-block; width: 150px; height: 15px; vertical-align: middle;"></span> 」と使っていました。
---

この辞典の価値は、1年間を通じて東祖谷に暮らす生徒たちが日常生活の中で実際に使われた言葉を収集しているところにある。また、彼らが行った意味の説明の中には、方言の意味の理解がどのようになされ、どのように変化するかを考える手掛かりとなるものがある。

また、例文の表記を見ると、「あくざら取ってくれえろや」「こらえてくれえろや」のように、「くれろや」のところに「え」で示された長音が現れる例がいくつか見られる。これは、金沢(1956)が指摘

している、「イキヨル(行きよる)」が「イキヨール」になることがあるという現象に通ずるものとして、祖谷弁(祖谷方言)の特徴が今も残っていると見ることができよう。

その他、ここに項目として挙げられた言葉の中には、「つうとん(=ジャンパー)」のように、他の地域や文献で確認できない(確認が困難な)ものもある。これらの性格については、今後の調査を待たなければならぬ。

以下に、見出し(ひらがな太字)と意味、「例文」、(使用者)の順で示す。なお使用者の部分は、☆で中学生を、◇で親の世代であることを、△で祖父母の世代であることを示す。

なお、参考として、俵裕編「祖谷の方言」(『ひがしいやの民俗』所収)の記述をカタカナ見出しで添えた部分がある。

#### ア行

あぎ あご。「こけて あぎ打ったわ」(◇)  
あくざら 灰皿。「あくざら取ってくれえろや」(◇)

あなんこ 穴。「ほけっとしよったら あなんこに はまってしもたわ」(☆)

いび 指。「いび切って痛いわあ」(☆)

いわた 石。「ちょっと そこのいわた のけえ」(◇)

イワタ 岩石、昨日の雨で〇〇の道へイワタが落ちたチュウワイヤ。

いんのこ 子犬。「いんのこ いんの」(☆)

うまえる 混ぜる。「水に塩をうまえる」(△)

おぐろもち もぐら。「おぐろもち あそこにおるぞ」(☆)

おこつる からかう。「おこつるなよ」(☆)

オコツル なぶる。「何時までもオコツルな、たいがいセエヤ」

おとどい 女の人と男の人のきょうだい。「おとどい 仲ようせえよ」(◇)

おどれ おまえ。「おどれ やつろう」(☆)

オドレ おのれ、オドリヤとも言う

おびかわ ベルト。「おびかわの穴 <sup>ひろ</sup>広がったわ」(☆)

おるこえ いますか。「おるこえ」(☆)

おんびき かえる。「朝おんびき踏んだわ」(☆)

オンビキ ひき蛙、ゴートとも言う

#### カ行

がいに すごく。「がいに せこいわ」(☆)

ガイニ 非常に、重い石を引っぱっても動かない、相手にガイニ引張らんカなど言う

かなつき 魚を突くヤスのこと。「かなつきで アメゴ 取ってくるわ」(☆)

きげんええこ きげんよろしいですか? 「きげんええこ?」(△)

きにょう 昨日。「きにょう ひいと中遊んだわ」(☆)

くびまき マフラー。「今日は寒いきんくびまきして行けろ」(☆)

ごうしも じゃがいも。「ごうしも炊いたらうまいんぞ。」(☆)

ゴーシモ じゃがいも、ホドイモとも言う

ごうとう がまがえる。「ごうとう 家におったらええんで。」(☆)

ゴート ひき蛙、オンビキとかカサゴートとも言う;

こいさ 今夜。「こいさ 寒いけんあ。ふとん着いて寝えよ」(☆)

こえぐろ わらぐろ。「あそこに こえぐろ あるで」(☆)

ござんした こんにちは。「あっ、ござんした。今日は寒い」(☆)

こしっと 子供。「今度、うちのこしっと帰って来るんよ」(☆)

コシット 子供、悪く言うとき

こばし スプーン。「こばし取って」(◇)

コバシ さじ、多くは竹で作ってオチラシ(はったい粉)をはねて食べていた

#### サ行

さがりまめいちご 木イチゴ。「アッ、さがりまめいちごだ」(☆)

さどい すばやい。「あいつ、さどいわいや」(☆)

しさがす ちらかす。いっぱいにする。「そこ、し

さがすなよ」(◇)

しゃっぼ 帽子。「しゃぼかぶって行こう」(☆)  
 しょいのみ 味噌になりかけのもの。「しょいの  
 みって、うまいな」(☆)  
 しわい しつこい。めんどい。「あんな子はしわ  
 いぞよ」(◇)  
 しわしわ ゆっくり。「香織よ、しわしわ行こう  
 や」(☆)  
 そえて よせて。つけて。入れて。「これもそえ  
 て送ろうや」(◇)  
 そんつらことゆうな そんなこと言わないで。  
 (◇)

ソソツラ そのような、ソソツラ役に立た  
 ん物作ってどうナリヤア

#### タ行

たばこのむ タバコを吸う。「あんまりたばこ飲  
 むなよ」(△)  
 ちゅうはん あぶない。「あのおとこしは、ちゅ  
 うはん」(☆)  
 ちよく 茶わん。「ちよく、ちよくちよく使う」(☆)  
 つうとん ジャンパー。「さぶいきん、つうとん  
 着い」(△)  
 つえる (土砂崩れなどで) 道がつかえる。「あの  
 道つえたわ」(☆)  
 てんにゃわん 手におえん。「この子は手んにゃ  
 わん」(△)  
 テニャワン 手におえない、テンニャワン  
 とも言う  
 てんごのかわ 全く余計なこと。「この忙しいの  
 にてんごのかわゆうな」(◇)  
 テンゴノカ 余計な手出し、コリヤコリヤ  
 テンゴノカするな、仕事の邪魔になるジャ  
 ないか  
 戸をたてえ 戸を閉めえ。「寒いきん、はよ戸を  
 たてえ」(◇)  
 どんのくび 首の後ろ。「今日の朝、どんのくび  
 打ったわいや」(☆)  
 どくろ 頭。「どくろ打って痛いわー」(☆)  
 どてぶし 手。「どてぶし、でかいのお」(☆)

#### ナ行

ながた 包丁。「そこのながた、とってくれ」(△)  
 なんつこ ~を言っているのですか。「なんつこ!  
 もう一回ゆうてや」  
 ねざ 寝床。「はよ ねざで 寝え」(△)  
 ねやしけ 布団をしいて。「はよ ねや しけよ」  
 ~のうや ~ですよ。ね。「あれヘンなのうや!」  
 (☆)  
 ノーヤ なあこの意、ソーjanyaノーヤなどと  
 のうちがう 寝違える。「イタイ!! ゆうべ の  
 うちがえたわ」(☆)

#### ハ行

はえつかる 髪が伸びてだらしないう状態のこと。  
 「もうはえつかつとるけん髪切れ」(☆)  
 はかんど お墓。「夜中にはかんど通ったらおと  
 ろしいわ」(☆)  
 ひいとい中 一日中・「ひいとい中、ゲームしよっ  
 たわ」(☆)  
 ヒガナイチニチ 終日、きのうはヒガナイ  
 チニチ雨が降ったノーヤ  
 ひじこ 肱。「冬になったら ひじこ切れていか  
 んわ」(☆)  
 ひたいばち おでこ。「ひたいわちに ニキビが  
 できたわ」(☆)  
 ひぼ 紐。「そこのひぼ とってくれ」(△)  
 べんとごり 弁当箱。「今日のべんとごりの中身、  
 なんぞえ」(◇)  
 へんぼ しっぽ。「その犬のへんぼ、見てみ」(△)  
 ヘンボ 動物の尻尾  
 ぼうふら かぼちゃ。「ぼうふらは かぼちゃね」  
 (◇)  
 ほえばる 鳴く。「そこの犬は よう ほえばる  
 んぞ」(△)  
 ほだぶし 足。「ほだぶしが痛い」(☆)

#### マ行

まくれる 落ちる。転ぶ。「車がまくれた」(☆)  
 マクル ころがす、ドマクルとも言う  
 まっこと 本当に。「まっこと疲れた」(みな)  
 マッコト 本当

めんめ 別々。「この菓子めんめに分けてくれえ」  
(☆)

メンメラ 各自ら  
ものもの 耳もとでささやく。「ものもの言うな  
よ」(◇)

モノモノ 私語，小さい声での内緒話  
もんがら 藁。「もんがら 編んだわ」(☆)

ヤ行

よちめえ 片づけろ。「おい，そこ ちょっとわ  
よちめえよ」(◇)

ラ行

りいきも さつまいも。「りいきも ふかしたら  
うまい」(☆)

リイキモ さつまいも，リュウキュウイモ  
とかカライモとも言う，リユーキイモとも

ワ行

わあ お前。「わあよ，こらえてくれえろや」(黒  
川)「わあらよ，ちっと勉強せえよ」(◇)

わやく 自分勝手。わがまま。「お前は，わやく  
ばっかり言うのう」(☆)

わんく 自分の家。「ちょっと わんくに帰って  
くるわ」(☆)

6. おわりに

旧東祖谷山村の言語は，全体を通して，ほぼ標準語やそれに近いものが多くなっているが，方言のその形を守り通しているもの，標準語に影響を受け薄れつつあるものなどもある。

今回は，アクセントについて述べることを控えたが，金沢治の一連の研究や森重幸の調査，また『徳島県言語地図』他の研究によっても，旧東祖谷山村

表4 インフォーマント情報

ID	現住所	性別	年齢	5年以上の外住歴
No.1	久保	男	71	なし
No.2	久保	女	84	なし
No.3	久保	女	61	33~53才 岡山倉敷
No.4	九鬼	女	74	なし
No.5	九鬼	男	76	なし
No.6	落合	女	91	なし
No.7	下瀬	男	77	なし
No.8	下瀬	女	93	なし
No.9	下瀬	男	71	なし
No.10	下瀬	女	66	なし
No.11	栗枝渡	女	85	なし
No.12	栗枝渡	男	73	なし
No.13	京上	女	64	なし
No.14	大枝	男	78	16~22才 徳島市
No.15	若林	女	78	なし
No.16	若林	女	60	19~24才 大阪市
No.17	小川	男	72	なし

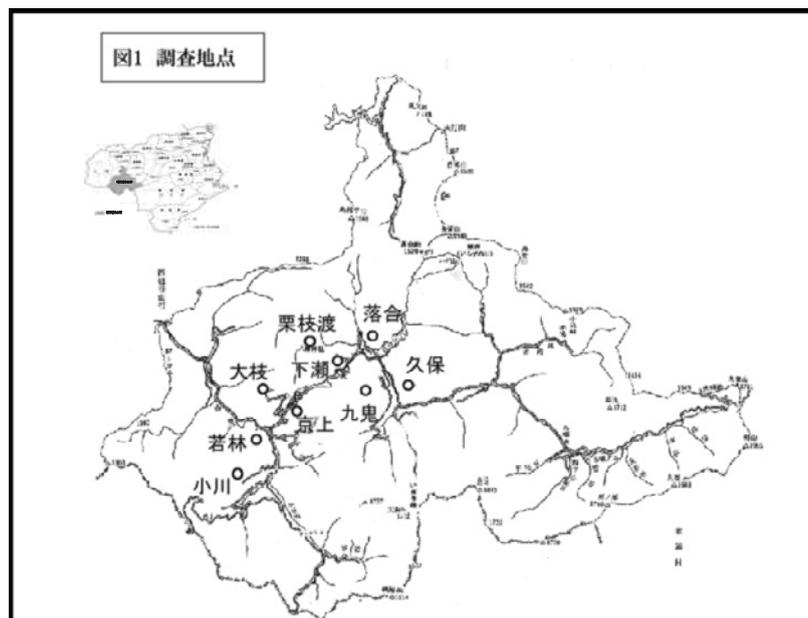


図1 調査地点

地域のアクセントは、徳島市型であり、三好郡の他の地域とは異なっている。その他の特徴も、詳細に調べると、実は剣山周辺地域に広く発見できるものが多いのである。金沢（1956）が指摘したのも、まさにその点にあった。

中世期に都で使用され始めた「オヒナル（お昼なる＝目を覚まし起きる）」や、さらに古い「ナイ・ナユ（地震）」や「オンゾ（御衣）」といった古語が、古語としての意識を伴いながら近年まで残っていた

らしい（金沢 1976, 俵 1990）。これらについても実は、祖谷に特有の語彙ではなかった。

もちろん微細に見てゆけば、『祖谷弁辞典』に見られるように、他の地域に無いと思えるような言葉が見つかることもあるが、しかし、それらが本当に祖谷地方に独特のものであり、そのことが他の地域との際だった違いを示すものかという点、そうは考えない方がいいだろう。祖谷は決して孤立した地域ではないのである。孤立した地域ではない以上、共

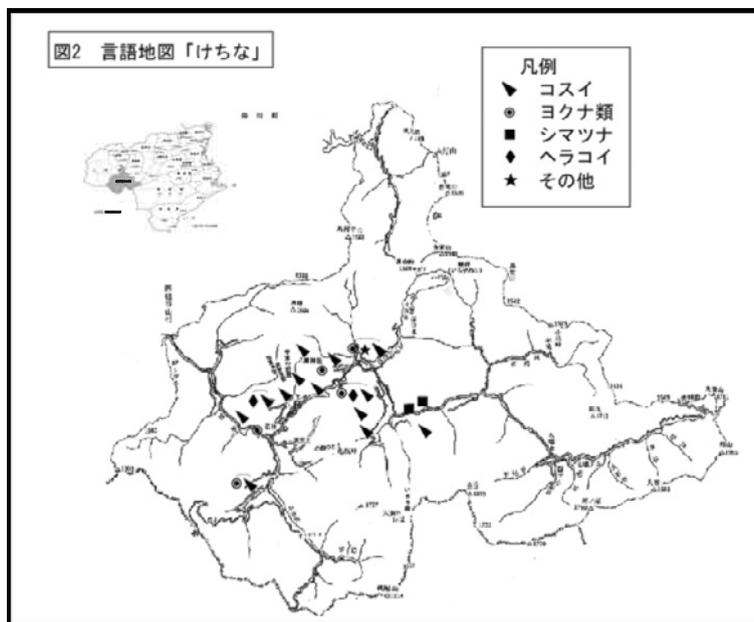


図2 「けちな」

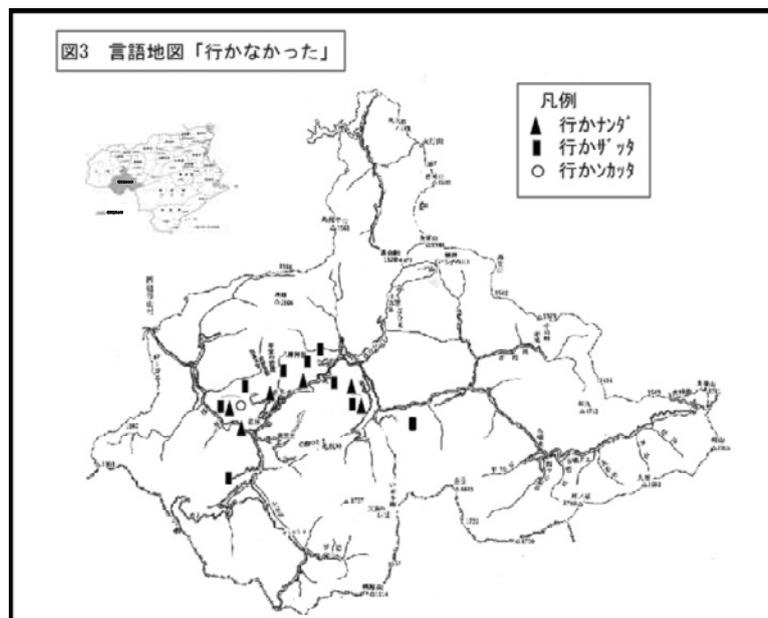


図3 言語地図「行かなかった」

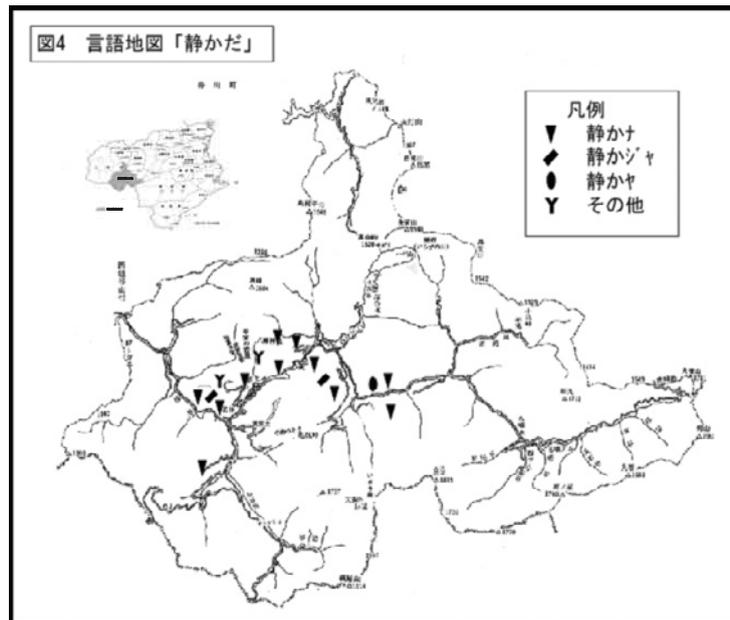


図4 言語地図「静かだ」

通の言語的特徴を持つ地域が周辺に見つかるのは当然である。今回の短期間の調査と限られた紙幅の中ではそれを明らかに示すことはできない。そのことは、もちろん今後の課題である。

#### 参考文献

- 井上史雄ほか(1997):『日本列島方言叢書 21 四国方言考① 四国一般・徳島県・高知県』ゆまに書房。
- 加藤信昭(1982):『阿波の言葉』石躍胤央・高橋啓編『徳島の研究 6 方言・民俗編』清文堂。
- 金沢治(1956):『祖谷地方の方言』久米惣七・原三正・今市正義編『祖谷:阿波の平家部落』祖谷刊行会・徳島県文化財専門委員会, 202~219頁。
- (1961):『阿波言葉の語法』徳島市中央公民館付属図書館。
- (1976):『改訂 阿波言葉の辞典』小山助学館。
- 国見慶英(1999):『脇町の方言と語詞』私家版。
- 四国放送テレビ「おはようとおくしま」ホームページ, [http://www.jrt.co.jp/tv/ohayo/c\\_awaben.htm](http://www.jrt.co.jp/tv/ohayo/c_awaben.htm)
- 仙波光明・岸江信介・石田祐子編(2002):『徳島県言語地図』徳島大学国語学研究室。
- 仙波光明(2006):『藍住町の方言』『阿波学会紀要 第52号 藍

- 住町 総合学術調査報告』阿波学会・徳島県立図書館。
- 田村正編(1968):『三名村史』徳島県三好郡山城町役場, 950頁。
- 俵裕(1990):『祖谷の方言』『ひがしいやの民俗』東祖谷山村教育委員会。
- 橋本亀一(1939, 1975復刊):『阿波の國言葉』国書刊行会。
- 平山輝男・上野和昭(1997):『日本のことばシリーズ 36 徳島県のことば』明治書院。
- 森重幸(1962):『分布図からみた徳島県の方言』阿波学会報告会資料。
- (1982):『徳島県の方言』『講座方言学 11 中国四国地方の方言』国書刊行会, 315~365頁。
- 森本安市(1979):『たのしい阿波の方言』阿波文庫⑦ 南海ブックス。

#### 方言教示者(敬称略)

以下の方々に、多くのことを教えていただきました。記して感謝申し上げます。

井上議, 采本清重, 岡本計美, 岡本レイ子, 梶元幸子, 喜田キミコ, 喜田當正, 瀧川喜文, 田中博幸, 都築麗子, 中窪ハルエ, 西尾キクエ, 西尾博之, 三谷シズコ, 西村幸子, 西村筐子, 細谷キヨミ